地方小出版 情報誌 アクセス

毎月1回　1日発行
購読料　定価150円（本体136円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

発行所　㈱地方・小出版流通センター
編集　アクセス編集委員会
〒162-0836　東京都新宿区南町20
TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

金魚のヒ・ミ・ツ

―金魚屋プレス11年の歩みと新刊９冊

文・石川良策（文学金魚編集人）

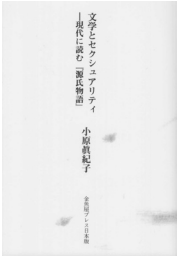
金魚屋プレスは新しいタイプの出版社として2012年3月に発足し、その第一歩として「総合文学Web情報誌 文学金魚」をWeb上にアップした。そこから一日も欠かさずに毎日、記事のアップを続けている。現在は巨大サイトとなり、アクセス数は日によるが、新人賞発表のときは一晩で11万アクセスを超える。

「文学金魚」は、文芸出版社における従来の〈文芸誌〉の位置付けだ。文芸誌とは何か、何のためにあるのかを突き詰めたらWeb形態になった。なお老舗文芸誌の〈Web移行〉とは異なり、画像満載かつ各界第一人者のインタビューなどは超々ロングが身上だ。オールカラーでコストは低く、毎日発信できて、SNSとの連携も容易く、読者へのリーチは紙媒体の比ではない。また演劇など興行のレビューはリアルタイムで、とWebのメリットを強く意識している。

しかし正直、発足当時は紙媒体を否定するかのような新参者への反感もあったように感じた。だが金魚屋スタッフは全員、本が大好きである。紙媒体が消えてなくなるとは決して思わないし、そんなことになったら生きてはいけない。単行本を発行するための文芸誌だからこその最大効率を考えたら、こうなった。

紙の本が大好きなスタッフや書き手は、とにかくいい本を出したい。出るべき本が出るとはかぎらない現状や、良本がいわゆる自費出版に追い込まれる現実には、まったく納得できない。世の中はどんどん変わっているし、何かソリューションがあるはずだと考えるところから始まる。解がある、と信じる目にしか見つからないものがある。

『夏目漱石論　現代文学の創出』
ISBN9784905221067



『文学とセクシュアリティ　現代に読む「源氏物語」』
ISBN9784905221074

2018年12月、「文学金魚」で連載されていた『夏目漱石論―現代文学の創出』（鶴山裕司）、『文学とセクシュアリティ―現代に読む源氏物語』（小原眞紀子）、金魚屋新人賞受賞作を含む短編小説集『佐藤くん、大好き』（原里実）の三冊が刊行された。いずれもWebでの華やかな雰囲気を残した装丁を心がけ、裏表紙に著者の（コスプレを含む）画像を大きく配した。特に東大卒女子である原里実の愛くるしい笑顔は話題となったが、これは新しい一方、古くからのアメリカの出版物の手法に倣ったものでもある。

『佐藤くん、大好き』ISBN9784905221050
右は裏表紙

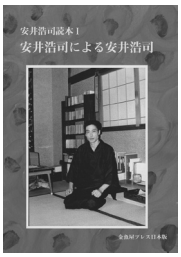
昨年11月には、後述する小説、評論、句集・詩集とあわせて九冊を同時刊行したが、装丁のコンセプトは基本的に一貫している。また念のために申し添えれば、金魚屋プレスは原則として自費出版は扱わない。世の中の変化に感応するところから始まったプレスだから、市場が見込める企画出版物しか出さない。実際に市場をつかむのはだいぶ先になったとしても、それに耐えられる仕組みを日々、何とか考え出すのが中心スタッフの仕事だ。工夫の一つを挙げれば、金魚屋プレスの〈副業〉は倉庫業（トランクルーム）である。その意味は、業界の方ならわかるはずだ。あぁ、と…。

しかし金魚屋プレス最大のヒミツは、倉庫に仕舞われてはいない。たとえば各界第一人者のインタビューもすでに27回を数えたが、そのオファーの際の企画書には、次のような文言を入れている。「創作者の育成および書き手の〈ユニオン〉としての機能も備えつつ、活動しております」。

本が好き、思うように本を出したい、またそれだけの力がある人々が存分に活躍できるフィールドを用意する。そのコンセプトのために多くの方がそれぞれ可能な範囲で協力してくださっている。具体的には各大学のスタッフや大学院生が多いが、ようするに〈知の喜び〉のために無償の愛を注ぎ込むことに長けた人々である。もちろん編集者も、版下作成者も営業担当も不足している。それでも高いレベルの本を書くほどの知性の持ち主らは〈協力の体験〉によってさらに自身の表現の可能性が拡がる、そのことに気づいている。おそらくは文学者同士の〈友愛〉の意味にも。それがこのWeb3.0時代の〈ユニオン〉である。

今回、上梓した九冊のラインナップをご覧いただくと、金魚屋プレスのもう一つの特徴〈ジャンルの越境〉が浮かび上がるかと思う。先頃、亡くなった俳人の安井浩司の最後の句集『天獄書』と併せてインタビューや99人の詩人・俳人による作品論などをまとめた『安井浩司読本Ⅰ 安井浩司による安井浩司』および『安井浩司読本Ⅱ 諸氏百家による安井浩司』が俳壇を越えて話題になっている。また2012年の文学金魚オープニングセレモニーとのタイアップ企画「安井浩司墨書展」公式カタログ『俳句と書 展』も再び動いている。

『天獄書』
ISBN9784905221142



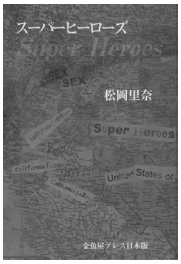
『安井浩司読本１　安井浩司による安井浩司』
ISBN9784905221159

『安井浩司読本２　諸子百家による安井浩司論』
ISBN9784905221166

『安井浩司「俳句と書」展』
ISBN9784905221043

「孤高の巨星」とよばれた安井浩司氏は生前、閉鎖的な俳壇に背を向け、結果としてその〈前衛詩人〉としての評価は高まる一方であった。文学金魚では、オープニング当初より安井浩司の魅力を作品論やインタビューでたびたび伝えてきたが、今回の句集『天獄書』と上・下巻の読本の刊行は、その集大成と言える。今後も予定されている関連コンテンツとともに文学史上の碑となり、また安井氏の在りし日の姿勢が俳句の世界への一石となれば、これに勝る幸せはない。

もう一つの話題作『スーパーヒーローズ』（松岡里奈）は、辻原登奨励小説賞・文学金魚新人賞の初の同時受賞を果たした長編私小説だ。先頃、共同通信社から英文学者 小澤英実氏の書評が全国１０以上の地方紙に配信された。その評も示しているように、一見セックスとドラッグにまみれた風俗小説のようでいて、その核は実のところ激しく理想を希求する〈観念〉だ。幼少期、自分に性的悪戯をした従兄弟の手を「ケチくさい」と断じた女主人公のスケール感と圧倒的な知性。アメリカ大陸を渡り歩きながら彼女が求めているものは、性はおろか死をも乗り越え、真に憧れる暴力で自身を組み伏せる「スーパーヒーローズ」という名の〈神〉である。



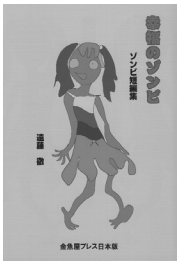
『スーパーヒーローズ』
ISBN9784905221111

金魚屋プレスでは、あくまで総論だが、小説にかぎって言えば今は〈女性作家の時代〉ではないか、と考えている。理由は単純に、小説読者人口が多く女性になっていることが第一である。また現在は大きな社会変革の過渡期であるため、男性作家はテーマをつかみにくい。一般に男性は社会構造に対する批評意識から自らのテーマを醸成してゆくものだ。一方で女性作家のテーマは極端に言えば、源氏物語の昔から変わっていない。しかしそれでバラエティに欠けるという結果にはならない。より普遍的なテーマであるからこそ、より変幻自在となる。

小原眞紀子は詩人であり、大学での講義を展開した『文学とセクシュアリティ―現代に読む源氏物語』の著者だが、文学金魚にはすでに五本の長編ミステリーを連載している。今回刊行された『香獣』は〈金魚屋ロマンチック・ミステリー〉シリーズ第一弾となる。元ファーストクラスCAの芙蓉子は総会屋の子飼いだが、各種の企業人が集まる謎の香席に潜入する。源氏香の主催は老舗のエゼーナ化粧品。そこで出会った異様な嗅覚を持つ男〈香獣〉を手なずけ、企業の闇と若い女たちの変死事件を追う。総会屋のボスを出し抜き、芙蓉子自身が生きるために。なにせ「女の優雅さは金になる」のだ。ミステリーらしいどんでん返しが幾度となく重なり、母性も女性性も小気味よく相対化されるが、あくまで乾いた筆致の中に、ほのかに抒情が滲む。紫式部の昔から、しなるように柔軟で強いエクリチュールこそが日本のフェミニンを表象してきた。

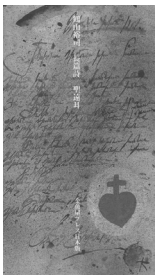
『香獣』
ISBN9784905221104

そしてこの〈女性作家の時代〉は同時に、社会的な枠組み、あるいは本屋の棚の仕分けにはまらない、奇才の男性作家をも生んだ。遠藤徹はデビュー作『姉飼』で日本ホラー小説大賞を受賞したが、当初から「これはホラーなのか？」と選考委員らを深く悩ませた。遠藤徹の小説のエネルギーは、あらゆるジャンルを揺さぶる。いったい何に分類すべきか困惑させ、しばしば爆笑させ、しまいに面白いんだからいいか、と諦めさせる。遠藤徹はマンガも描き、音楽も動画もよくする。溢れる創作力はジャンルの垣根をなぎ倒すエネルギーそのものであり、まさに死者すら蘇らせかねない。今作『幸福のゾンビ』とほぼ同時に、工作社から評論『ゾンビと資本主義』が刊行された。

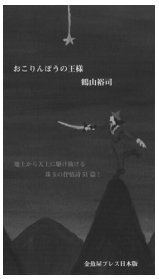


『幸福のゾンビ　ゾンビ短編集』
ISBN9784905221128

安井浩司に呼応するかのように、安井氏の若き盟友であった鶴山裕司もまた、この度三冊を上梓した。二冊の詩集『長篇詩　聖遠耳』と『おこりんぼうの王様』は、かつての『東方の書』、『国書』（題字・安井浩司）の詩人としては一瞬、様変わりしたようにとられ



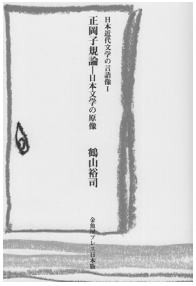
『長篇詩　聖遠耳　ＳｅｉＯｎｊｉ』
ISBN9784905221081



『おこりんぼうの王様』
ISBN9784905221098

るかもしれない。しかしながらそこに流れているのは一貫した〈歴史感覚〉である。長い長い時間軸の中で自身とそのテキストを、自由詩の行末を見定めている。

『長篇詩　聖遠耳』は、耳の手術で入院中の二週間の間に書き下ろされた。ベッドの上に流れる時間、看護婦とのやりとり、そこに去来する古今東西の出来事、ホメロス、セイレーン…。このペルソナと引用の手法はエズラ・パウンドを踏まえ、収監されていたパウンドの長篇詩を彷彿とさせる。行数からいっても本邦初、たしかに詩の歴史がじわりと動いた。そして文学金魚連載の「現代詩人論」で「現代詩は終わった」と論じる鶴山裕司は、もう一作の『おこりんぼうの王様』では童話等からふんだんに引用しつつ、現在の読者が求める詩の姿をも描き出す。クリスマスに誰かに贈りたくなる詩集でなければ、出す意味などないではないか？　なお『長篇詩　聖遠耳』の装丁は、ロベール・クートラス著作権相続人の岸真理子・モリア氏のご厚意により、一見の価値がある素晴らしいものとなった。文学金魚に「言葉と骨董」を連載する鶴山裕司は、現代美術・古美術の目利きでもある。



『日本近代文学の言語像1　正岡子規論　日本文学の原像』
ISBN9784905221135

鶴山裕司の三冊目は、『正岡子規論―日本文学の原像』である。安井浩司三部作と響き合い、今日の俳句を文学として真剣にとらえる向きには必ず参考になるだろう。ちなみに安井浩司の最後の句集『天獄書』の装丁は、処女句集『青年経』をリフレーンしている。文学はその時代の精神を表す個人の営為でありながら、優れた作品はその時代だけを規定するものではなく、集団の無意識をも形づくるものだ。大きな変革の波を迎える今、〈出版社とは最良のコミュニティを形成するもの〉と認識を新たにしつつある。金魚屋プレスの価値の中心は今後も紙の書籍にあるが、同じ価値観でNFTなども視野に入れ、さらなる取り組みに邁進したい。

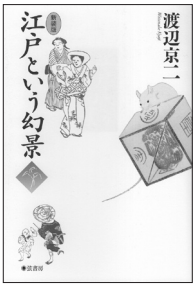
＊

（いしかわ　りょうさく・文学金魚編集人）

新刊ダイジェスト

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

『江戸という幻景　新装版』●渡辺京二 著



本書は、昨年12月25日に92歳で亡くなった近代思想史家の渡辺京二氏が、2004年に刊行した『江戸という幻景』の新装版となる。新刊というわけではないが、改めてこの機会に読み返してみたい。巻末には新たに三浦小太郎氏の解説が付されている。三浦氏はその解説で、渡辺さんの代表作【逝きし世の面影】との対比で本書『江戸という幻景』の位置についてうまくまとめているので引用させていただきたい。「渡辺京二の代表作とされる『逝きし世の面影』と、本書は同じく江戸時代を扱っている。しかし、『面影』は、幕末から明治初期に日本を訪れた西洋人の記録をもとに江戸時代について考察したものであり、そこには日本人から確実にかつての文明が失われていくことへの愛惜感がにじみ出ている。本書『江戸という幻景』は、江戸時代に書かれた文献、特に随筆や紀行文を中心に構成されているため、より直截的に江戸時代の精神世界が読者に伝わり、確かにある幸福な時代があったのだという感銘を与えてくれる」。　例えば、『逝きし世の面影』で、イザベラ・バードが日本の行く先々で、ごく当たり前のように親切なもてなしを受けるのに驚き、「私は（日本には）親切な人々がどこにでもいることについて語りたい」とその著書で書いていることが紹介されている。翻ってこちらの『江戸という幻景』の第三章「真情と情愛」では、勝海舟の父親である勝小吉の回顧録から、小吉少年が十四歳で家出した時の道中の様子が取り上げられている。金もなくなり時に病も得た行く先々で、この放浪児はよく声をかけられ、またよく情にあずかり、当たり前のように食と宿を供され、金銭さえ与えられることもあった。見知らぬその家の子のようにしてもらった、という記述もある。いずれもかつてこの国のどこでも見られた、渡辺氏が言うところの「真情」が当たり前のように通いあう「ある幸福な時代」の光景が鮮やかに切り取られているのがわかる。が、『逝きし世の面影』のイザベラ・バードは外部からの、本書の勝小吉少年は内部からの視点であるという相違が見て取れる、ということである。

ところで本書はどの章から読んでもよいと思う。どこを通っていっても読者はその「真情」が通い合う不思議と豊かな世界に至ることができる。解説の三浦氏が推しているのは第九章「隠された豊かさ」である。この章で渡辺氏が拾っているのは、菅江真澄によって描写された下北半島や東北地方の光景だ。真澄はその土地の暮らしが外見上貧しいものであってもそれをただちに悲惨と解さず、むしろそのうちに含まれる豊かさや充溢を読み取ろうとする。第七章「風雅のなかの日常」では、どこぞに名木ありと聞けばその庭を訪ね見ずにおれない、当時の人々のささやかな風雅の心が描かれる。第八章「旅ゆけば」を読むと、江戸期の思いもよらぬ豊かな旅事情が知れる。第十章「ぬしが殿様じゃったや」は、この章タイトルをみるだけで何やら豊かな感情が込み上げてくるのを感じないだろうか。本書を改めて読み終えてみると渡辺氏が第一章「振り返ることの意味」で述べている言葉が、実感を持って迫ってくるのを感ずる。「…私はただ、近代が何を滅ぼして成立したのか、その代償の大きさを思ったのである…江戸という時代は、近代への根本的な内省をうながさずにはおかぬ幻景として、私のまなうらでほのかに揺れている」。（N）

◆1800円・四六判・263頁・**弦書房**・福岡・202303刊・ISBN9784863292642

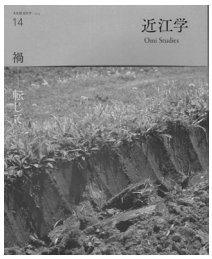
『植原悦二郎の国民主権論―日本国憲法の源泉』●高坂邦彦 著

明治10年に長野県安曇野で生まれた植原悦二郎は、苦学してロンドン大学で博士号を取得し、大正デモクラシーの揺籃期に、『通俗立憲代議政体論』を上梓した。明治憲法をイギリス政治学の視点から、「国民主権」「象徴天皇」「責任内閣制」と解釈し、リベラルで急進的な言論は、ドイツ政治学で権威化されていた学界、政界に衝撃を与えた。犬養毅に懇望されて大正6年に国会議員になり、戦中は東条首相を批判して翼賛選挙に落選するが、戦後、日本自由党の結成に参画し、日本国憲法発布に当たっては国務大臣として名を連ねた。改憲論議がかまびすしい近年、日本国憲法の源泉に植原の憲法論があるとの評価がされているという。植原の政治学・憲法論の真価はどこにあるのか。吉野作造の民本主義への批判や、冷ややかに見つめた美濃部達吉の天皇機関説事件、忍び寄る国体明徴運動などを通して、植原の思想の核心は、徹底した国民主権であることを浮かび上がらせる。

本書は表記書名を第一部とし、「第二部　憲法学者宮澤俊義教授の足跡」、「第三部　リベラリスト清沢洌の思想」の独立した三部構成になっている。三人は同郷で共にリベラリスト、しかも、孤高の在野精神をもっていた。著者は製作途中の昨年11月、本書を手にすることなく他界された。出版社の追悼のあとがきに、「危うい時代にさしかかっている日本の行く末に警鐘を鳴らし続けた」とある。その思いがひしと伝わってくる。（飯澤文夫）

◆ 2800円・四六判・290頁・**龍鳳書房**・長野・202301刊・ISBN9784947697776

『近江学　第１４号』●成安造形大学附属近江学研究所編



喜怒哀楽の日常を積み重ねながら、禍を伴う生老病死をたどっているのが人びとの一生であろう。この文化誌の冒頭「禍 転じて―再生への道筋」で写真家の今森光彦氏は、そういった禍と人の暮らしについて論じる。崖崩れや水害によって一掃された植物は新たな命を芽生えさせる。同様にそこに暮らす人間はその経験から知恵を生み出す。里山文化もその一つだという。世界的に流行した新型コロナウィルスの感染拡大は、私達を苦しませたが、「近江における厄除　元三大師信仰」では、平安時代の天台僧 良源が、疫病から人々を救うため、夜叉の姿となって疫病を退散させたという、元三大師信仰の由来を述べる。その姿を写した「角大師」は疫病や災い祓う魔よけの護符として、今も厚く信仰されている。

「大津絵と疱瘡絵　近江発、禍への絵画的対抗手段」によると、かつて疫病の代表格は天然痘（疱瘡）であり、神の祟りなので神のご機嫌こそが禍の要因とされた。したがって集落や地域全体で祭礼を挙行して疱瘡の神様を歓待してもてなし、なだめて鎮め、域外までおとなしく移動してもらい、異界に送り返すことが疫病対策であった。「かわそ信仰と女性」の項では、6月ごろ滋賀県北部で行われる「かわそ」祭を解説する。腰下の病、つまり婦人病に効験があるとして、主に女性の信仰を集めた。近江地方には、禍をさける・はらう・おくるための様々な四季折々の祭礼が行われ、禍を転じて福となす祈りが続く。

（古賀邦雄　古賀河川図書館）

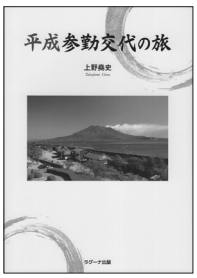
◆ 1800円・260mm × 210mm 判・95頁・**サンライズ出版**・滋賀・202302刊・ISBN9784883257829

『死に方の流儀―中村メイコさんと山折哲雄先生に訊く』●瑞田信弘 著

「上手に生きて・上手に死のう」がモットーの香川県高松市にある浄土院称讃寺の第16代住職の著者。日本はすでに超高齢社会に突入し、住職が担当した葬儀も確実に増加しており、20年間で約2000人の生死を見つめてきた。「死」にどう臨むのかは人それぞれだが、上手に死ぬ準備が終活とも言える。　本書は地元でのトークセッションが縁で実現した女優・中村メイコと宗教学者・山折哲雄との対談をベースに「生き方・死に方」を切り口として人生論としても参考になる。中村メイコは終活に関する著書も多く、本人の終活について、夫・神津善行との生活や子どもたちへの希望を語る。美空ひばりや山田五十鈴などのエピソードが飛び出すのも中村メイコならではだろう。一方、山折哲雄からは死生観や仏教界への提言など厳しい意見が出される。自身、何度か病に伏し、終末期の医療に対して確固たる信念を持ち、医学の進歩により平均寿命が延び、生と死の間に「老」と「病」の領域が広がり、死を先延ばしにするから死を必要以上に恐れるようになったという意見も説得力があり、もっと「老病死」に仏教界が関わるべきだと叱咤激励する。二人に当意即妙に応える住職も見事である。　医療、介護、葬儀、相続などの実践アドバイス付。特に住職が実際に見聞した事例には考えさせられることが多い。人生の最終章をいかに暮らすかで本人や家族の満足度も変化する。貴重な指南書である。（Y）

◆ 1200円・四六判・270頁・**アートヴィレッジ**・兵庫・202301刊・ISBN9784909569677

『平成参勤交代の旅』●上野堯史 著



江戸時代に各大名が遠く離れた領地からはるばる江戸まで上らなければならなかった参勤交代。九州南端に位置する薩摩藩も江戸までの長旅を陸路・海路を交えて行っていました。その参勤交代の旅路を平成の世（2000～2007年）に辿った記録が本書です。薩摩藩の参勤交代路は西海路や九州路などいくつかありますが、著者が選んだのは日向路。鹿児島から鹿児島湾を船で大隅国福山（霧島市）へ渡り、そこからは陸路日向国細島（日向市）へ。細島からは日向灘・瀬戸内海を経て播磨国坂越（赤穂市）で上陸、そこから一路山陽道・東海道を東に進むコースです。ちなみに海を渡る区間は鉄道や高速バスなどでの代用となります。

しかしこの日向路の跡をトレースするのはなかなか大変だったようです。道を間違えてはわざわざ戻っては歩き直しをしたり、歩道がなくて歩くのに危険な個所もあったり、嘆きの声がたびたび本書に現れます。参勤交代をはじめとして多くの人が行きかったであろう大道も、場所によっては細い道になっていたりと、道の栄枯盛衰を感じさせます。それでも辻々にはかつてをしのばせる史跡が多く残されているのは由緒ある道の名残でしょうか。かつての参勤交代路が150年を経た今どのような佇まいを見せているかという貴重な記録となっています。それと同時に、几帳面な著者は道中ポイントごとに所要時間や歩数までしっかりと計測、日向路を旅してみたい人にも格好の資料となります。

（副隊長）

◆2700円・A5判・358頁・**ラグーナ出版**・鹿児島・202301刊・ISBN9784910372105

地方小出版流通センター　ジャンル別 新刊案内

2023年2月1日～28日
流通センター着

※各ジャンル内での出版社名は所在地の北から南の順に並んでいます。

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

【雑誌】

◆**Kappo** vol.122 2023年3月号 プレスアート編 298mm × 230mm 111頁 800円 プレスアート ［宮城］ 978-4-503-22773-7 23/02

◆**S－style** 03 vol.699 プレスアート編 280mm × 210mm 120頁 500円 プレスアート ［宮城］ 978-4-503-22782-9 23/03

◆**GREEN REPORT** 518 2023年2月号 廣瀬 仁編 A4 191頁 2546円 地域環境ネット ［埼玉］ 978-4-909864-50-5 23/02

◆**かまくら春秋** No.633 2023年1月号 伊藤 玄二郎編 B6 108頁 327円 かまくら春秋社 ［神奈川］ 978-4-7740-0872-1 23/01

◆**AXIS** Vol.222 2023年4月号 上條 昌宏編 297mm × 225mm 128頁 1636円 アクシス ［東京］ 978-4-503-22788-1 23/04

◆**Be！** 150号 No.179 今成 知美編 A5 109頁 870円 アスク・ヒューマン・ケア ［東京］ 978-4-909116-32-1 23/03

◆**地方史研究** 第421号 地方史研究協議会編 A5 144頁 1143円 岩田書院 ［東京］ 978-4-86602-871-2 23/02

◆**子どもと読書** 458号 2023年3・4月号 親子読書地域文庫全国連絡会編 A5 44頁 509円 親子読書地域文庫全国連絡会 ［東京］ 978-4-907376-60-4 23/02

◆**月刊終活** 270 2023年3月号 清水 明央編 A4 84頁 1500円 鎌倉新書 ［東京］ 978-4-503-22787-4 23/03

◆**月刊住職** No.292 2023年3月号 矢澤 澄道編 A5 183頁 1546円 興山舎 ［東京］ 978-4-910408-23-1 23/03

◆**子どもの文化** No.618 2023年3月号 片岡 輝編 A5 47頁 290円 子どもの文化研究所 ［東京］ 978-4-503-22786-7 23/03

◆**セセデ** vol.744 2023年3月号 朝鮮青年社編 A4 43頁 482円 朝鮮青年社 ［東京］ 978-4-503-22783-6 23/03

◆**東京かわら版** No.596 2023年3月号 佐藤 友美編 203mm × 110mm 166頁 545円 東京かわら版 ［東京］ 978-4-910085-31-9 23/02

◆**みんなの図書館** No.551 2023年3月号 図書館問題研究会編 A5 80頁 750円 図書館問題研究会 ［東京］ 978-4-503-22779-9 23/02

◆**おりがみ** No.572 2023年5月号 日本折紙協会編 A4 51頁 728円 日本折紙協会 ［東京］ 978-4-86540-126-4 23/03

◆**海運** No.1145 2023年2月号 日本海運集会所編 A4 68頁 1200円 日本海運集会所 ［東京］ 978-4-503-22776-8 23/02

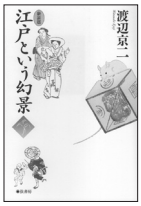
◆**Fuji Airways Guide** No.706 2023年3月号 フジ・インコーポレーテッ

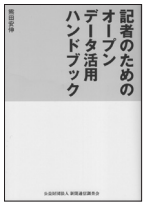
売行良好書

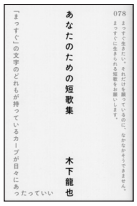
期間：2023年2月15日～3月14日
※価格は本体価格表示です。別途消費税がかかります。

［出荷センター扱い］

(1)『おり鶴さん』1500円・書肆侃侃房　(2)『新装版　江戸という幻景』1800円・弦書房　(3)『仁義ある戦い』1700円・忘羊社　(4)『記者のためのオープンデータ活用ハンドブック』700円・新聞通信調査会　(5)『あなたのための短歌集』1700円・ナナロク社　(6)『あのとき僕は』1500円・しなのき書房　(7)『英国児童文学の舞台を訪ねて』1600円・東京子ども図書館　(8)『振り返れば未来　山下惣一聞き書き』2000円・不知火書房　(9)『水上バス浅草行き』1700円・ナナロク社　(10)『愛ことば』1200円・岩手日報社　(11)『小さきものの近代１』3000円・弦書房　(12)『熱き魂、汝の名はジョンツ　横浜弧狼伝』1800円・壮神社







［ジュンク堂書店池袋店　地方出版社の本―センター扱い図書］

(1)『汚れた歳月』2800円・エディションイレーヌ　(2)『埼玉花めぐり　２０２３』300円・埼玉新聞社　(3)『ヨコエビはなぜ「横」になるのか』2400円・広島大学出版会　(4)『江戸という幻景　新装版』1800円・弦書房　(5)『仁義ある戦い』1700円・忘羊社　(6)『公民館のしあさって』2200円・ボーダーインク　(7)『武蔵戦国歴史年表』1800円・まつやま書房　(8)『論集　松江城１』3500円・ハーベスト出版　(9)『あなたにとって文学とは何か』500円・忘羊社　(10)『造船記』3500円・中国書店（集広舎）　(11)『ボランティアと有償ボランティア』1800円・弦書房　(12)『もうひとつのこの世』2200円・弦書房　(13)『こんにちは、昔話です　復刊』1200円・北野書店　(14)『みるみるわかる生活リハビリ　駒場苑がつくった介護百首』1600円・全国コミュニティライフサポートセンター　(15)『アイヌからみた北海道１５０年』1600円・北海道大学出版会

以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
ＵＲＬ：http://neil.chips.jp/chihosho/　　ツイッター公式アカウント：@local_small

トピックス ―― ★★★

▼奈良敏行・田中淳一郎共著【街の本屋はねむらない】（1997年アルメディア刊）という本があります。リードに「地域社会って何なのか、その中に活きる街（町）の普通の本屋って何なのか…二十一世紀に必ず生き残るであろう二つの書店現場です」とあります。この本の最初に「町の本屋という物語」を語っている奈良敏行さんのお店が、鳥取にある定有堂書店です。駅前通りをちょっと街なかに行ったところにあるの路面店です。1980年に元郵便局員だった店主の奈良さんが開店しました。開店した時には周辺には24軒の書店がありましたが、今では2軒になっています。このお店は書店員の「聖地」と言われ、書店開業を目指す人、書店員として働きたい人の憧れで、40年営業を続けてきましたが、店主・奈良さんの高齢化と体調不良に伴い、今年中に閉じる決断をされたそうです。引き継いでくれる方を探したそうですが、いままで創ってきた特色や本屋さんとしての佇まいを体現できる方はいなかったようです。定有堂さんは1点だけですが出版もやっていて、当社扱いで流通しています。これは当面継続して扱います。ところで日本の市町村で「書店なし」は26.2%になります。その中で、書店なし50%を超えるのは長野、奈良、沖縄で、40%を超えるのは北海道、福島、高知、熊本となります。日本における書店業は戦後以来、大部数が流通する雑誌販売を主体に発展し、そこに多品種少量の書籍販売が組み合わさることで、多様性のある環境が創られてきました。それにコミックが加わって販売額の成長をもたらしました。しかし販売金額が大きかった雑誌は、最盛期である1996年は総販売金額の59%にあたる1兆5633億円を占めていましたが、2020年になると往時の3分の1にまで減少しています。コミックにおいてもデジタルシフトが進み、21年には7000億円弱の市場ですが、6割強が電子コミックとなっています。紙コミックで比較すると20年間で市場は45%縮小しています。紙の市場の減少は止まらない現状で、それに伴い書店の減少も続いています。特に定有堂さんのように、団塊あるいは団塊よりもちょっと上の店主が始めたお店が後継難で撤退しているのが寂しいです。（川上記）

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

honto
ネット通販で地方・小出版流通センター扱い本がご購入いただけます。
honto.jp
hontoではお客様の読書スタイルにあわせて
電子書籍でも紙の本でもご購入でき、hontoポイントは
ネットでも書店でも使えて、貯められます。
地方・小出版流通センター扱いのご当地本もネットで
ご購入いただけます。
くわしくは honto.jp へアクセスください。